

special
edition
nippon
toru
funamura

熱くて温かいニッポンの男

船村徹、ひとり列伝

かつて、日本の男は世界一だった。特に武士道をわきまえた男たちの「完成度」は、西洋の知識人たちの羨望的だった。確固たる信念と毅然とした態度からくる隙のない風貌、一点の曇りもないほどの礼儀正しき、そして内に秘めた情熱と優しさ……。それらを併せ持った、希有な男たちだった。そして、彼らに負けず劣らず、日本の女性も世界最高の徳を備えていた。これは思い過ごしてはいない。幕末期や明治期に外国人が書き記した書物を読んでも、それらが垣間見える。しかし、現代の日本人はどうだろうか。かつて武士道の精神を生んだ民族の末裔だとはにわかに信じられないほどの体たらくとなってしまった。

だからこそ、かつて日本人が携えていた美徳を失っていない日本人を見ると、感銘を受ける。そして、気圧される。作曲家の船村徹氏もそのひとりだ。多くの日本人が失ってしまった日本の「心」をいまだに厳然と持ち続けている。熱い情熱は泉のごとくとめどなく溢れ、人への思いやりはじわりと温かい。だから、船村氏といっしょにいると、幸せな気持ちになる。その温かさを他の人につなぎたいと思いたくなる。自分のやるべきことをしっかりとやり続けることが大切だと思えるようになる。

熱くて温かいニッポンの男、船村徹の源泉を探る。



撮影：中里 悠二



「日本人の心情、誇りを歌に託したい」

人間・船村徹の礎を追う

船村徹という人間の限りなき深さ

船村徹という人間には、喜怒哀楽が普通の人の十倍くらい詰まっているのではない。取材を含めて頻繁にお会いするうち、そういう印象を強くした（偶然にも、船村氏の音楽事務所には喜怒哀楽という名前がつけられている）。現代の日本人はともすれば感情が乏しい人が少なくないが、喜怒哀楽を喪失してしまった人間がいかにか空虚なのか、昨今の世相を見ればその答えに満ち満ちている。

今まで私は船村氏ほど情感豊かな人に出会ったことがない。だから、今回の仕事は革命的な体験と言っている。世の中にさまざまな感動があるが、精進した人間に直に接することほど心躍る出来事はない。

一挙手一投足が大胆にして繊細、言葉の端はしに心の襞が垣間見え、他を納得させるにじゅうぶんな実績を携えているのにけっして威圧的ではない。成功して傲慢になった人を何人も見ているが、船村氏はその対極にあるようだ。

そして、さまざまな分野における豊かな知識にも驚かされるが、船村氏は知識を無駄に蓄えているのではなく、しっかりと自分の信念にリンクさせている。だから何時間話しを聞いていようと、退屈するということがない。あくまで私見だが、見川鯛山に「怒」の要素をプラスした人が船村徹となるのではないだろうか（もちろん、この場合の「怒」はともていい意味である）。

そのような船村氏の人間形成はどのような道を経てきたのか、世に出るまでをたどりながら、それを考える上での道しるべを示したい。

生まれてすぐ、ウグイスを真似る

船村徹氏は昭和七年、栃木県塩谷郡船生村（現塩谷町）に生まれた。本名は福田博郎という。「僕は生まれつき疲れてたんです。だって、名前がヒロオですよ」

そう自分の本名をユーモアたっぷりに語ってくれた。つまり、ヒロオは疲労に通ずるというわけだ。

兄二人、姉三人の六人きょうだいで、かなり歳の離れた末っ子だった。父六十歳、母四十二歳の時の子どもだったので何をやってもあまり叱られることはなかったという。そのためもあってか行動半径はかなり広範に及んだ。当時、男の子が家の中にこもっているなど考えられないことだったが、その中でもかなり腕白ぶりを発揮していたらしい。

「時代背景もあったと思いますが、まさに軍国少年でしたね。山ガキ、川ガキ、それこそ野山や川を縦横無尽に駆け巡っていましたよ。夏は兵隊ごっこ、冬は裏山でスキー。栃木は雷が多いことで有名だけど、あの当時は今よりもっとパワーがあ



生家の縁側で、姉と。玩具はふんだんにあったようだ。

ったような気がします。雷が激しく鳴ってもパンツ一丁になって川で泳いでいてね、近くの高圧線の鉄塔に吸い込まれるのを間近で見ても大急ぎで逃げて帰ったり。とにかく腕白でしたよ」

父・岸三郎は麻布獣医学校（現麻布大学）を第一期生として卒業した後、郷里に戻り、日本で初めての獣医師の一人となった。カイゼル髭、三つ揃いのスーツ、金縁メガネという出で立ちは当時の田舎ではかなり異彩を放っていたようだ。

その父の仕事ぶりが博郎少年の目には奇異に映った。なにしろ朝から座敷にでんと座って酒をちびりちびりやっているのだ。幸いにも牛や馬や犬などの「患者」は絶えることがなかったが、ほとんどは助手たちが診察していた。時々、体裁を繕おうとするかのように十メートルもある特製の聴診器を出し、自分は座敷に座ったまま助手に聴診器を患部に当てさせる。岸三郎は十メートルも離れたところで聴診器を耳に当てているのだが何やら助手とブロックサインを交わしている。見立てを装うために、なんらかの取り決めがしてあったのだろう。そして、最後はいつもの〈野州下野国秘薬 生駒散〉を処方する。それは岸三郎が考案した秘薬であり、当時としては珍しく雑誌に広告



桜の木の下で（小学1年生の頃）

を出し、全国に通信販売もしていた。生駒散の中心は、近所の子どもたちにわずかな小遣いを与えて山野から採ってこさせたドクダミやゲンノショウコなどを乾燥させたものに重曹などを混ぜた粉薬だった。これがさまざまな病気に効いた。牛や馬ばかりでなく、人間にも処方していたようだ。息子の病気にも処方していたことは言うまでもない。

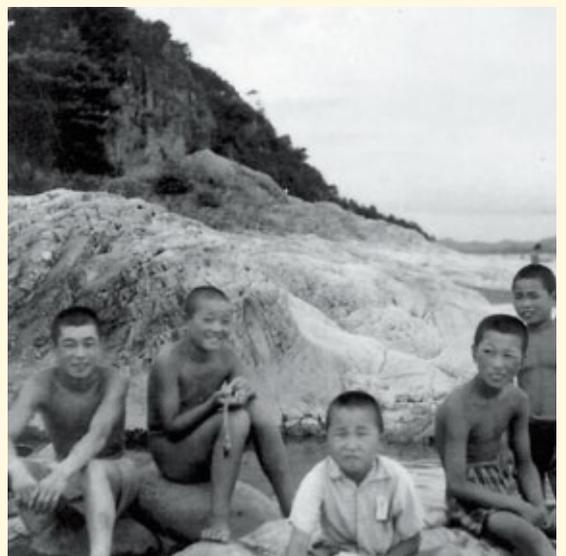
十メートルもの聴診器については後日談がある。「本当にそれで聞こえるのかなと思って試したことがあるんだけど、ガーガー音がするだけで何も聞こえない（笑）。親父は演技派だったんでしよう。病気でも骨折でも生駒散だったからね」

当時、福田家には二、三人の乳母がいたのだが、お七夜を迎える前の博郎を背中におぶっていた乳母が、父にこう言っていたのを家族が憶えている。「この赤ん坊は大変ですよ。ウグイスの真似をして鳴いたんです」

モーツアルトは四歳の頃に自分で和音を見つけ、うっとりしていたと言われているが、船村氏も幼少の頃から自然界の音に敏感だったのだろうか。

やがて成長するにつれ、その乳母の発見がただの勘違いではなかったことが判明する。絵本や教科書を朗読すれば自然に節をつけて歌にしてしまおうし、隣近所の念仏を唱える会合では「自分ならこうする」と勝手にメロディーをつけ、叱られることもあった。言葉を読んだり聞いたりすると、自然にメロディーが湧いてくるというのだ。

小学四年生の時、博郎は父親からラッパを買ってもらった。孫のような年齢差のある子どもだったためか、カイゼル髭の父もねだられると弱かったらしい。ひと泣きすると、数日以内にお目当ての品物が枕元に置いてあったという。



近くの鬼怒川で（小学6年生の頃、左から2人目が船村氏）

「まさにひと泣き千両でしたね。兄は厳しかったけど、父は甘いというか、大甘でした」

そうやって手にしたラッパを夢中で吹き、やがて博郎は学校のプラスチックバンド部に入り、トランペットを吹くことになる。あの時代、田舎の小学校にプラスチックバンド部があるのはとても珍しかったが、和洋の音楽が流れていた家庭環境も含め、少年時代の船村氏を取り巻く環境はかなり恵まれていたといっていいたいだろう。プラスチックバンド部には東京芸大から月に一、二回、専門の講師が教えに来てくれていた。もともと、演奏する内容はほとんどが軍歌。軍隊ラッパを高らかに吹くことは憧れの的でもあったのだ。

国民学校六年生の時の通知票にはこう記されていた。「綴り方巧みにして、芸能に優れている」。船村氏の才能は音楽だけに限らなかつた。小学六年の頃にはゲーテの『若きウェルテルの悩み』や吉田絃二郎の『島の秋』を読んでいたほど文学に親しんでおり、三十歳の頃まで小説家も目指して

いたというが、早やその才能の片鱗が現れていたのだろう。ただ、当時、音楽家という進路はありえなかったという。戦時中ということもあり、男子の進むべき道は士官学校を出て偉い軍人になることであった。そもそも音楽が職業になる時代ではなかったのだ。

終戦の年の昭和二十年四月、博郎は旧制今市中学に入学した。十二歳上の兄は県内の名門宇都宮中学（現宇都宮高校）を特待生並みで卒業し、後に陸軍士官となるエリートだが、博郎は地元は今市中学でトランペットやギターにはかり現をぬかしている。そのことを母・ハギは嘆いていたという。

「まったくデレスケ（栃木弁でバカよりひどいという意味）なんだから。同じ親からできた子とは思えないよ」

博郎に対してデレスケというのが母の口癖だったようだ。しかし、一方、家に残っている博郎に特別の愛情を注いでいたというのも事実だった。昭和十八年に夫をなくし、翌年には陸軍士官の息子・健一が戦死、翌年には博郎の異母兄が亡くなり、たて続けに身内を失ったハギにとって博郎は愛情を注ぐべき最後の存在となった。早く大人になれ、とまだ学生だった博郎に毎晩のように晩酌をしてくれたという。

しかし、博郎は将来音楽の道を目指したいと母に明言できないでいた。音楽の道はチンドン屋になることだと母親はじめ親族は思っていた時代だ。そのため、自分の志望は内に秘めたまま、船生村に疎開していた著名なギタリストにギターの手ほどきを受けたり、日光や鬼怒川に來ている進駐軍のアメリカ兵に演奏を披露して小遣いを稼いだり、と演奏技術を磨きながら虎視眈々と進路を見定め

ていた。そして昭和二十四年春、博郎は東京へ遊びに行つてくると言い残し、東武線で浅草へ向かった。十七歳の時だった。

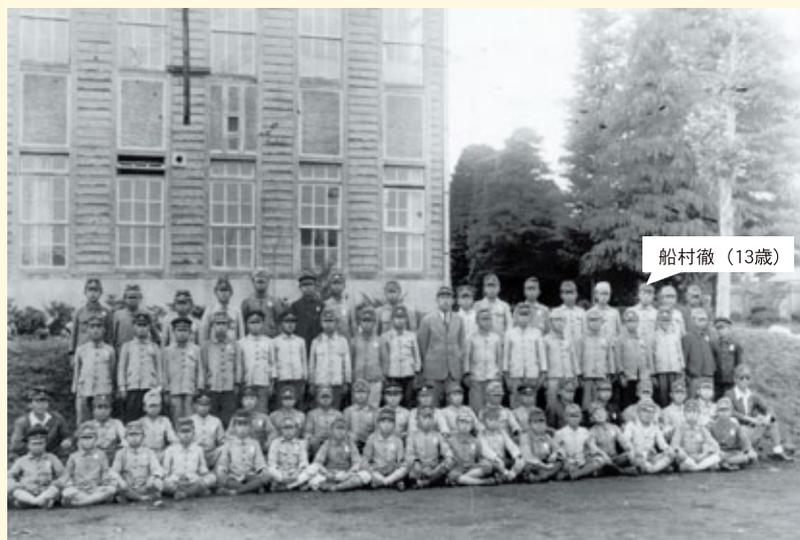
徹底的に自分を追い込む勉強法とは

上京したのは東洋音楽学校（現東京音楽大学）に入学の願書を出すためだった。一週間ほどで家に帰り、音楽学校へ進む旨を母に伝えた。ハギは泣いて反対した。健一が戦死してしまったので、福田家の跡取りは博郎しかない。しかし、博郎の意思は固かった。

入学式には保護者が同伴することになっていたが、博郎に同行したのは姉だった。終戦後四年経っていても建物の約半分は空襲によって壊れたままで、扉の替わりにむしろが垂れていた。あまりに貧乏たらしい風情に、姉は泣きながら「こんなところに入って乞食みたいな生活しなくてもいいじゃない。いっしょに栃木に帰ろう」と博郎を諭したという。しかし、そんなことで決意が翻るはずがない。

作曲家を目指していた博郎であったが、入学当初はピアノ科に入った。実技試験の時のエピソードが面白い。

「二十代後半のきれいな先生でしたよ。さあ、弾いてごらんさいって言うんです。譜面を見ると何かのソナチネでした。僕は一度もピアノを弾いたことがないから弾けませんって言ったんです。先生は目を丸くして、これくらい弾けなくてどうするのと言うわけです。そう言われながらも先生の胸のあたりに目がいつてしまつてね（笑）。それならどうしてピアノ科に入ろうとしたんですかと訊いてくる。弾けないから教わりに来たんです



旧制栃木県立今市中学校入学式（昭和20年4月）。終戦の年である。

と僕が答えると、変な人ねあなたは、と半ば呆れ顔なんです。そのうち、先生は何を思ったのか、僕の受験票を見ながら、あなたの出身は日光や鬼怒川に近いのかしらって訊くんです。僕も調子いいですからね（笑）、自転車で十分くらいのことろですよ、先生、よろしかったら今度僕がご案内しますかと答えたいんです。本当は何時間かかるんだけどね（笑）。すると、これからは人一倍勉強しなきゃだめよ、というひとことです。世界広しと言えど、何も弾かないでピアノ科の試験にパスしたのは僕だけじゃないかな。もつとも、その後は先生に言われた通り、猛烈に勉強しましたけ

どね」

当時、ピアノが珍しかった時代、自分が自由に練習できるピアノなど、あろうはずもない。博郎は池袋で貸しピアノ屋を見つけ、なげなしのお金をはたいて練習に通った。時間貸しであるため、一秒たりとも無駄にはできない。瞬間瞬間が真剣勝負の連続だった。だからこそ家にピアノがある人と練習の密度はまったく違った。ピアノの練習だけでは足りない。音楽理論も猛烈に勉強した。

「都会のエリートたちにどうやって勝てるかと考えた時、彼らは七、八時間眠っているのだから、僕は三時間くらいの睡眠で、あとは勉強しようと思っただけです」

当時の決意をそう語る船村氏だが、その睡眠時間は今でも変わらないというから驚きだ。四時間は寝過ぎだという。その分、本を読んだりテレビを見たりして夜の静かな時間を過ごす。

「慣れればなんでもないですよ。あの頃は片手にギターを持って、電車の吊革につかまりながら熟睡したもんです。ピアノの実技だけじゃなく、音楽理論も勉強しなければいけないわけですから、時間はあればあるほど助かったんです」とこともなげに言う。

また、ギターの練習をしている時のエピソードも興味深い。真剣に練習する方法の手本のように、なんと博郎は、一回間違っただけに自分が大切にして



日光の姉と（20歳の頃）



ピアノの横で（21歳の頃）

いる物を壊すというルールを自分に課した。当時、最も大切にしていた物のひとつにレコードがあった。物不足の時代、レコードはとても貴重で高価だったのだ。それを若き船村徹は、練習で間違っただけに壊したのである。これでは真剣に練習せざるをえない。講師やコーチがいない時、どうやって自分を追い込むことができるか、その答えの見本のような人が、それを真似できる人はほとんどいないだろう。それを自ら考えてやり遂げる。まだ学生の時分に、そこまで自分に厳しくできたという精神力に脱帽するのである。

生涯の友との運命の出会い

五月頃のある授業でのひとコマだ。ある学生がもっともらしく答えていたが、中身は支離滅裂だった。とっさに博郎は「チクコケ、コノー！」と怒鳴っていた。栃木弁で「いいかげんなことを言

っているんじゃない」という意味だ(※ただし、現役の栃木県人から言わせてもらえば、チクコケは意味不明である)。教室は一瞬静まり返った。やがて、それが栃木の方言であることがわかり、教室中に爆笑がこだました。博郎は恥ずかしさで汗が噴き出した。終業のベルと同時に屋上に上がり、なぜあんな大声で栃木弁を喋ってしまったのか後悔した。すると、後ろから声が聞こえてきたのだ。「俺は茨城だつぺよ。栃木のどこなんだつぺや？」振り向くと、細身の男が笑顔で立っていた。彼こそが船村氏とデビューまでの苦楽を共にした高野吉郎、後の高野公男だった。

その後の二人の奮闘はあとのページに譲るとして、その出会いがなかったとしたら、その後の船村徹はあっただろうか。もちろん、何らかの形で大成していたことは間違いないだろう。しかし、夭折した高野氏への慚愧の念を抱き続けたからこそ創り上げられた楽曲があるはずだ。つまり、高野氏との出会いは必然であったのだ。船村氏も感慨深げに当時を述懐する。

「どう考えても不思議なんだよ。どうしてあの時、栃木弁で、しかも大声で叫んでしまったか。あんな風に言ったのは、あの時だけだったんだよね。なにかこう自然の力に導かれて声に出してしまっただような、そんな気がするんですよ」

その時に限らず、船村氏は人生の岐路に立った時、何らかの見えない力に導かれて誤った道を選ばずにすんだという実感をもっている。自然や神々への畏怖がそのような感覚を研ぎ澄ませているのかもしれない。

高野吉郎は茨城県西茨城郡稲田町(現笠間市)の出身。方言は栃木とかなり似通っている。教室に突如鳴り響いた栃木弁に親しみをおぼえ、屋上

まで博郎を追ってきたのだろう。博郎にとっても救いの神であった。その日から二人の親交が深まっていくのである。

ここで当時の食糧事情に話題を変えなければいけない。その頃の博郎は無我夢中で音楽にいそしんだと書いたが、実はそうとばかりも言えない。なぜなら、博郎は常に飢えていたのだ。食事は食糧配給の枠内でしかない。エネルギーを膨大に消費する若者に足りるはずがない。音楽のこと以外、

意識の中にあっただのはほとんどが食べ物のことだったという。それでも一年後には一週間に一度の割合で米の飯を食べられたというが、おかずなど贅沢なものがあるはずもない。向こうが透けて見えるような配給のパンとわずかばかりの福神漬を食べ一日をしのぐという日々が続いた。「いつも腹の中で風が吹いている感じ」と船村氏は表現するが、常に満ち足りた生活をおくっているわれわれ現代人にはわからない感覚だ。そういう状



栃木県今上市にある楽想館。船村氏の自宅兼事務所は神奈川県藤沢市辻堂にあるが、週の半分以上はこの楽想館で弟子たちと共に過ごす。「歳をとると生まれ故郷に戻りたくなってね…」故郷を愛する気持ちはこのほか強い。



楽想館の庭に作られた愛犬・愛猫たちの墓。特殊な加工で墓石に写真が印刷されている。近くには白いベンチも。船村氏の優しさがうかがえる。



ポロ子を抱く船村氏。(撮影/福田文昭)

態にあつてなお、三時間ほどの睡眠時間で勉強を続けられたこと自体驚異に値する。

ところで笠間市の自宅から常磐線で通学していた高野は銀シャリに不自由していなかった。博郎の目には高野が食べていたご飯が本物の「銀」にさえ見えた。やがて、親友の窮状に気づいた高野は博郎の分まで持つてきてくれるようになった。当時の博郎にとつて、それがどれほど価値あるものだったか、われわれには知る由もないだろう。ただ、想像することはできる。ひもじい思いをしている時に真の友人がどれほどありがたいかを。そういう状態から這い上がってきたということ、船村氏は決して忘れてはいない。いや、それどころか、歳を増すごとに記憶が鮮明になってくるのかもしれない。だからこそ、九月八日の高野公男の命日に墓参することを一度も欠かしたことがないのである。

二十一歳で、なんと千曲以上を作曲

話しを戻そう。高野公男という絶好の相棒を得た船村徹はまるで何かにとり憑かれたように曲を書き続けた。高野は「復興のために働く人々の慰めになる音楽を作るべきだ」と船村を諭し、「俺が茨城弁で詞を書くから、おまえが栃木弁で曲をつくれ」と激励した。互いの会話がそのまま音楽になったように、生きた歌が次々にできあがった。ここで船村徹という名前について記しておこう。この名前は昭和二十五年から使っている。船村は出身の船生村からとり、いつも母に三日坊主のデレスケと言われていたことから貫徹するという意味で「徹」と名づけた。

さて、その後船村は銀座の流しで食いっないだ

り、高野と組んで珍妙な音楽団を結成して地方巡業し、あげくスッテンテンになるなど、けつして順風満帆ではなかったが、やがて少しずつ認められるようになり、三橋美智也の『ご機嫌さんよ達者かね』や春日八郎の『別れの一本杉』などのヒット曲で作曲家としての礎を築き上げる。極めつければ、戦後初のミリオンセラーとなった村田英雄の『王将』のヒットだ。その後、国民的歌手・美空ひばりに五十曲近くも提供するなど、飛ぶ鳥を落とすような活躍を続ける。その間の詳細を知りたい方は、日本経済新聞社の『歌は心でうたうもの』をぜひ読んでいただきたい。日経新聞に連載された「私の履歴書」を一冊にまとめたもので、船村氏の半生が詳しく描かれている。

蛇足を承知でつけ加えるが、正直に告白すれば、ロック、ジャズ、クラシックなど西洋音楽一辺倒だった私は、最近に至るまで演歌にはまったく馴染みがなかった。本特集で船村氏をご紹介したいと思つたのは、氏の人や国を思う温かい心など、人間・船村徹に惹かれてのことだった。ところが、船村氏に実際にお会いしてますます尊崇の念を深めるにつれ、演歌の魅力が少しずつわかるようになってきた。船村氏のような「人間力」がなければ到底削り上げることのできない世界であるということが徐々にわかってきたのだ。実際、美空ひばりが歌う船村作品に鼻唄の曲がいくつもできた。やはり日本人の心の中に脈々と流れ続けている共通の記号は明らかにあるのだろう。日本人でなければ心の琴線に触れることのない「何か」が、それを船村氏は明瞭に持つており、五線譜に書き写すことができるのだ。

船村氏の人柄に触れ、氏の作品を聴く。日本人として生まれて良かったとつくづく思うのである。

Funamura Method

船村徹は天才で努力家だった。 その創作プロセスとは……。

今までに五千曲以上もの膨大な作品を生みだしてきた船村氏。ひとくちに五千というが、それは途方もない数字である。いつたい、船村氏はどのようにして作曲術を身につけ、仕事の現場ではどのようにして創作しているのだろうか。

ど

うやったらあのように多くの優れた曲を作ることができのさだろう。いつたい、どこに曲想の泉が隠されているのさだろう。簡単な節さえ思いつかない素人から見れば、船村氏の実績は同じ人間の所業とは思えないのだが、では、「天才だった」で済ませていいのだろうか。

前述のように生まれてすぐウグイスの鳴き声を真似ているし、朗読でもなんでも自分なりにメロディーをつけて読むという少年だった。

しかし、天性の能力だけで超一流にのし上がれるほど世の中甘くはないはずだ。

その通り。実は船村氏も人知れず、途方もない努力を積み重ねているのである。

作曲家になりたいと志を定めてから、船村氏は日記をつけ始めた。もちろん、ただの日記ではない。日記なら多くの人がつけている。人と同じこ

とをやっては人よりも長ずることはできないのは古今東西に共通する鉄則である。なんと船村氏の日記は、言葉とメロディーの双方によってその日の出来事を表現していたのだ。

まず、その日の出来事を文字で綴る。楽しい日もあれば哀しい日もある。それを正確な言葉で書き連ねた後、今度はそのページの下に五線譜を書き、そこに上の文章に合ったメロディーを書いていくのだ。つまり、その日の喜怒哀楽を綴る感情日記でもあるのだ。それを年間三百六十五日欠かさずことなく何年も続けたという。そのような地道な努力を積み重ねて天性の能力に磨きをかけていった。では、最後の最後に曲になるプロセスというものはどういふものなのか。

「作曲と言っても基本的にドレミファソラシドを組み合わせるだけだからね。だいたい採譜するま

でアイデアの素は頭の中にあります。頭の中でモヤモヤとしたものが漂っているんです。靈感というかインスピレーションというか、モヤモヤしたものが頭のどこかにひっかかっているんです。締め切り直前になるまでそのモヤモヤを放っておいて、ある時一気に採譜するんです。そういう時は誰に話しかけられても何にも聞こえない。あっちの世界へ行っていますから」

では、船村氏はさまざまな曲にどのような思いを託しているのだろうか。

「日本人の歌です。メイド・イン・ジャパン、メイド・イン・栃木の歌を作ることです。日本人と

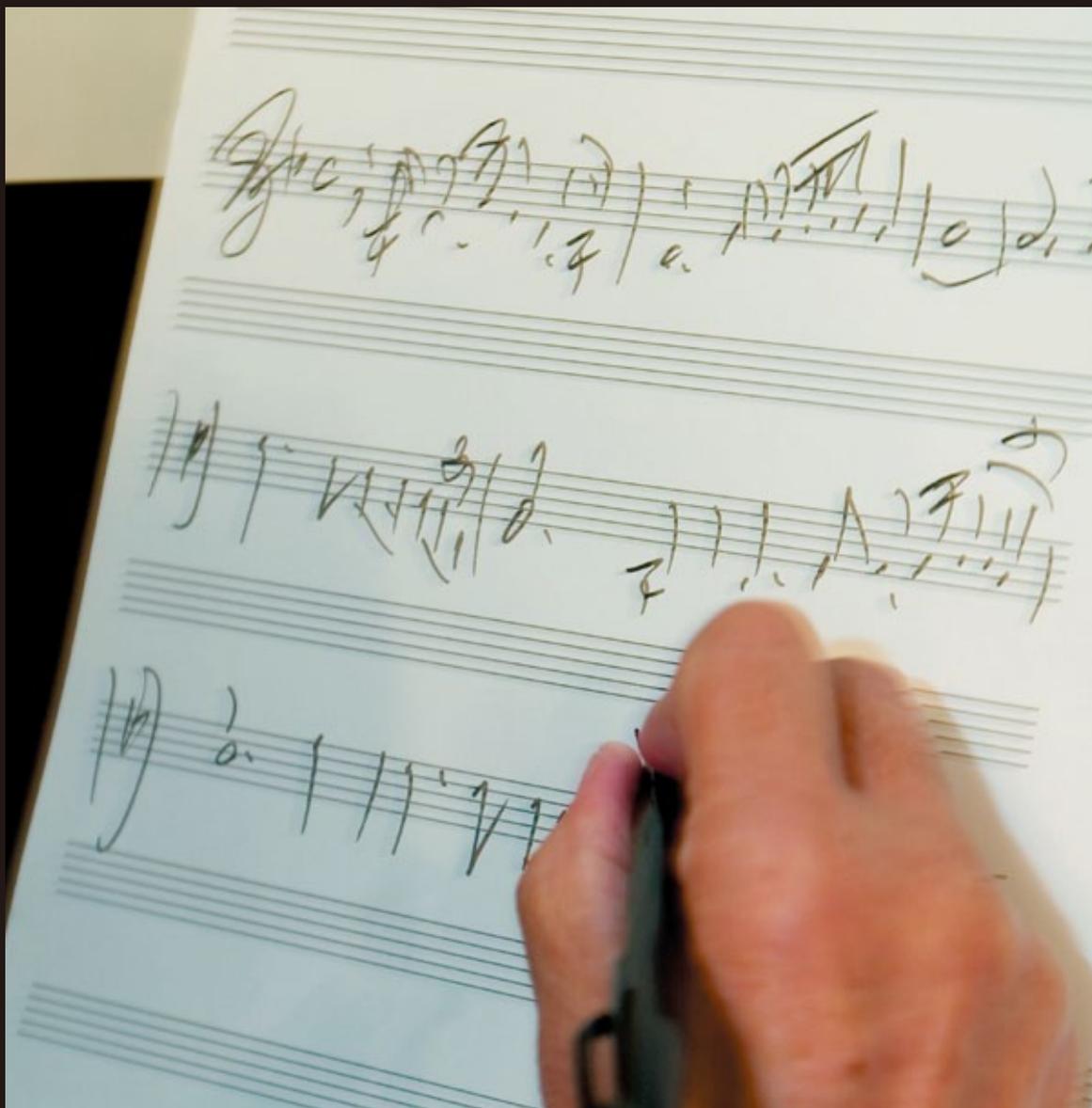


「モヤモヤがパーッと曲になっていく」



ピアノの表現能力も並みではない。

してのソウルを感じさせるような、ね。目移りせずに保守本流を貫きたいと思っています。借り物じゃない、付け焼き刃じゃない保守本流を」
たしかに船村氏の曲を聴くと、自分が日本人であることを強く再認識させられる。祖先から受け継いできたDNAの中にある日本人としての本質が刺激され、喚起されるのかもしれない。
では、船村氏の作品は日本人以外には理解されないのだろうか。アメリカ人は理解しそうにないがフランス人なら理解しそうだ、というのが私の見方だ。小津安二郎の映画や宮崎駿の『もののけ姫』や書や盆栽が自然に受け入れられるフランスなら、あるいはヒットするかもしれないと思う。フランス人は日本人と同じように観念で芸術を鑑賞できる民族だからだ。
船村演歌のフランス進出を企画するプロデューサーは、どこかにいないものだろうか。



五線譜に音符を書き込むスピードは驚くほど早い。一流の仕事は実に美しいのである。



病床の高野公男と。

高野公男

若き日の船村徹を語る時、高野公男の名は欠かせない。いや、若き日に限らず、船村徹を語る場合、けつして忘れてはならない存在が高野公男だと言える。熱い夢を抱く二人はどのようにして出会い、どのような友情に結びつけられているのだろうか。

作

詞家・高野公男との出会いはすでに書いた。「高野は僕にとって戦友みたいなもの。戦後の厳しい時代、二人三脚で助け合い、ようやく明かりが見えてきた頃、高野は死ななければならなかった。衝動的に、これで俺も終わりだと思っただ。どうして？ どうして死んだんだと考えるもわかることじゃない。七年間ずっといっしょだったから。一人じゃできないことも互いに助け合いながら少しずつ階段を昇ってきたんです。よく言われるように、百の苦労は五十と五十に分けられるんです。それなのに死んでしまった。死なれちゃ困ると何度心の中で叫んだことか！」

故高野公男を語る時の船村氏の声色に翳りを感じるのはい過ぎだろうか。

高野が結核のため息をひきとったのは昭和三十一年九月八日。病床で衰弱しきった体にむち打っ

て書いた最後の作品がある。「男の友情」がそれだ。

流れる雲は ちぎれても
いつも変わらぬ 友情に

東京恋しや 逢いたくて
風に切れぎれ 友の名を
淋しく呼んだら 泣けてきた
たそがれ赤い 丘の径

「東京恋しや 逢いたくて」とは、東京にいる船村氏のことを歌ったものだ。とろけるような恋愛をしている恋人同士でもここまでピュアな思いは抱かないかもしれない。

「高野の肉体は滅んだけど魂は今でもある。今までに何度も高野の声を聞きました。高野が死んで絶望の淵で沈んでいた時は、俺の分まで生きると

いう声が聞こえた。コロムビア専属をやめてフリーになるかどうか迷っていた時も、高野の二十七回忌コンサートを終え、水戸のホテルで打ち上げをやった後部屋で休んでいると、おまえフリーになれよ、という声が聞こえた。はつきり、そう聞こえたんです。専属とは拘束されることで、いずれば床の間の置物のようになって、埃をかぶったまま捨てられてしまうかもしれない。それなら原点に帰れ、という声でした。二人で戦後の焼け野原を歩いた原点に帰って」

船村氏より二歳上の高野公男は東洋音楽学校を中途で退学し、バーテンダーをやりながら詞を書き続けていた。客の飲み残しのウィスキーや日本酒やドブクなどをバケツに混ぜ入れ、朝方船村氏が住むアパートに持って来るのが日課だった。あらゆる酒が混じった「高野ブレンド」は夏場で

「アイツがいたから今の僕がある」



高野公男が肌身離さず持っていた大学ノート。彼の作品がぎっしりと書き込まれている。今となつては船村氏の宝物である。

あれば三回くらい発酵していたかもしれないと船村氏は笑う。

そんな野放図な出来事も今となつては懐かしい記憶のひとつだ。

「もし高野に出合っていないかつたら、ちがつた人生を歩んでいただろうな。この仕事を何十年も続けてこなかったかもしれない」

毎年九月八日、高野公男の命日には大勢の同行者を伴い、茨城県笠間市にある墓を訪れる。自らメッセージを刻み込んだ石碑に花をたむけ、山中腹にある墓へ行き焼香する。その後、近くの集会場を借り切って地元の人たちなど大勢の仲間たちと高野を偲ぶ。没後五十年になろうとするのに、毎年欠かしたことがないのだ。

成功すると原点を忘れ、同時に恩も失念してしまふ人が多い中、船村氏の行いは特筆に値する。もちろん、他意はまったくなくない。ただただ、ありし日に受けた友情に感謝し、霊を慰めるためだけののだ。

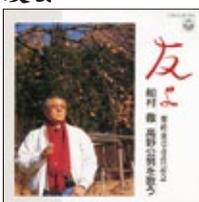
高野公男とのエピソードはいくらでも出てくるようだ。船村氏は焦点を遠くにやりながら流々と話し続ける。

しかし、ふと我にかえつたようにぼそつとつぶやいた。

「高野のことを話すのはつらいよ」

ともに苦労した親友のことをもつともつと語りたいたいの、語るのはつらい。相矛盾するやりきれない思いが船村氏の胸にうづくのさだろう。

友よ



歌：船村 徹
発売：ユニバーサルミュージック

演歌巡礼



歌：船村 徹
発売：日本コロムビア

友への想いがにじむ自作自唄



古城跡地に立つ高野公男の慰霊碑。出世作となった『別れの一本杉』の歌詞と船村氏のメッセージが刻まれている(右)



「兄が今も僕を守ってくれてくれる」

昭

和十九年に戦死した兄・健一に対する想いも生半可ではない。衆想館の居間には兄の写真をはじめ、兄が書いた書、戦死した時に乗っていた輸送船の精巧な模型など、兄に関わりのあるものが数多く飾られている。

「兄は陸軍大尉でしたから威圧感がものすごく、会う時はいつもビリビリしていました。お付きの人もいましたし。戦死する二年前くらいでしょうか、サイゴンに行っていた兄が本土に呼び戻されたんです。戦況が劣勢になるにつれ、日本の科学力がアメリカに劣っていることを政府も認めざるをえなかったんでしょうね。日本の科学のエリートを集めて陸軍科学学校を作り、一年間ハイテクを学ばせることにしたんです。それに召集されるくらい兄はエリート将校だったのに、部下への思いやりが旺盛で、僕は子ども心にも兄は偉いのにどうしてそういうふるまいをするのかと訝ったこともあります」

船村氏より十二歳も上の兄・健一はたしかに雲の上の人だったらしい。子どもの頃は態度が悪いと顔を張り飛ばされ、三メートルも吹っ飛んだことがあった。それでも兄に対する尊崇の念は変わらない。

「戦地に赴く直前のある日、家に帰って来た際、夜遅く兄は僕の寢床に入ってきたんです。すでに酒を一升ほど飲んでいましたから酒臭くてね。お兄さん臭いか？ ごめんな、と言いながらいろいろな話しをしてくれました。その時に、おまえは軍人になるんじゃないぞ、と強い口調で言われま

した。死ぬのは俺だけでいい、と。情報将校でしたから日本が負けるとわかっていたんでしょうし、自分の死期が近いことも悟っていたんでしょうね。それから布団の中で『ドリゴの愛のセレナーデ』をハーモニカで吹いてくれたんです。兄が十九歳の時でした」

その予感通り、兄は輸送船団を率いて南ニューギニア方面へ向かう途中、撃沈されて亡くなった。享年二十三歳だった。八百五十五名の部下も兄と運命を共にした。ただし、兄のおかげで命拾いした人がたくさんいる。

「本来であれば部下は一人でも多くほしいはずですが。人が不足していましたし、仕事は山ほどありますからね。でも兄は体調の悪そうな人を見つけるとは、おまえは病気だから入院するようにと命じて船から降ろしたんです。当時ですから、そう言われた軍人は兄を憎んだそうです。戦線を離脱することは軍人にとって恥ですから。私は記録をもとに、兄が乗っていた長城丸に乗り組んでいた人を訪ね歩いたことがあるんです。信州のある家に



帰省した兄と（5歳の頃）。

行きますと、床の間に兄の遺影が飾ってありました。奥さんと共に出迎えてくれたその人は、やはり兄から命令されて泣く泣く船を降りた方でした。その方は、兄のことを私たちの神様だと言っている



兄が乗っていた長城丸の精巧な模型。設計図をもとに専門家にオリジナルで作らせたもの。



ベトナム・ハノイにて。

福田健一

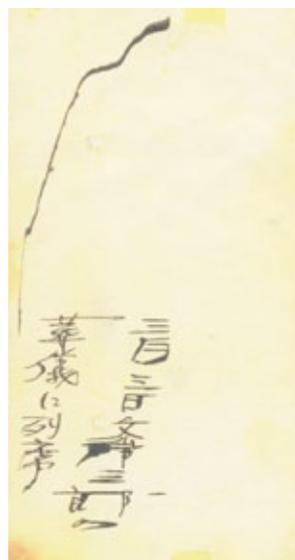
昭和十八年、戦死した陸軍大尉・福田健一は船村氏の兄であり、尊崇の的でもある。船村氏の兄に対する心はいかなるものか、そして当時の若者たちの厳しき、優しさとは……。

ました。あの時は冷たい隊長だと思ったが、戦争が終わってから当時の兄の気持ちが変わったと」
昭和六十三年、船村氏は川崎汽船の厚意により、LNG船に乗せてもらい、長城丸が沈没したと推定される海域に行き、洋上供養を行ったのだが、その日の模様を記録したビデオを編集するため、栃木から東京へ向かう日のことだった。出がけに、ふと忘れ物に気づき、書齋に戻った。仏壇の隣に感熱式のファックスがあり、その間に白い紙がひらひらしているのが見えた。気になってその紙を取ろうとするが、狭い場所なのでなかなか取れない。ようやく取り出し、文面を見た時、船村氏の体が震撼した。そこには「三月三日父岸三郎の葬儀に列席」と書いてあったのだ。

話で話していたのだ。ひとりは出席していたと言いつつ、ひとり欠席だったと言う。そんなおりのファックスである。
「あれはまちがいなく兄からのメッセージです。感熱紙ですから、そこに思いがあれば記録することは不可能ではないはずですよ」
たしかに熱による転写は電話よりも前に発明されている。
「つくづく思いますよ。兄にしてもその他の人たちにしても、あの頃は純粹な気持ちで国を想い、残してきた人たちのためにかげがえのない命を散らしていったんです。でも時代が変わって戦争が悪かったとなると、そういう人たちが悪し様に言われてしまう。いっいたい、そういうことを言う人たちに心があるのですか、と私は聞きたい。そういう人たちのおかげで、今あなたが平和な



暮らしをしているんじゃないですか、と」
後述するが、船村氏の国を想う心や国のため国民のために亡くなった人たちへの想いも特筆すべきことだ。日本以外のあらゆる国では当たり前のことでも、この国では異端扱いされかねない。そういう軽佻な世の中の雰囲気に対し、船村氏は厳しい視線を向ける。まさに「怒」の船村徹なのである。



仏壇と隣のファックス機の間で挟まれていた紙。感熱紙なので黄ばんでいる。

不世出の天才歌手との 壮絶な闘い。

美空ひばりと船村徹。この二人のコンビにより、五十曲近い名曲が生み出された。

しかし、そこに至る道のりはけつして平坦ではなかった。果たして、どのようなプロセスを経て作品は仕上げられたのか、その一端を明かす。



彼 彼女は歌い手でありながら、文学者でもある。船村氏の口から出てくる美空ひばり評を聞くと、やはり美空ひばりという歌手は不世出の天才だったのだという思いを強くする。

船村氏は二十四歳の時に初めて美空ひばりに曲を提供して以来、合わせて五十曲近く、彼女のために作曲している。美空ひばりが他の追隨を許さない国民的歌手だったことを否定する人はいないと思うが、もし、船村氏からそれほど多くの曲を提供してもらわなかったとしたら、と考えると、二人のマッチングが戦後の歌謡界においていかに重要であったかがわかる。

例えば、『みだれ髪』という曲がある。美空ひばり最後のシングルとなった作品である。昭和六十二年当時、美空ひばりは病のため福岡市の病院に入院していた。そして、彼女の再起をかける曲の依頼が船村氏にきた。船村氏は体調を気遣い、歌いやすい曲をつくりたいと申し出たが、美空ひばりはいつもの船村メロディーをお願いしますと言ってきかない。そこで船村氏はいつもより半音高い、歌いこなすのが難しい曲を仕上げ、病床の美空ひばりに送った。

美空ひばりほどの歌手であれば、譜面を見ただけでその曲の全体像、詞の背景に潜む情念を読みとることができる。退院後、レコーディングの時、美空ひばりのそのような才能が証明されることとなった。

船村氏は「♪投げて届かぬ思いの糸が」の中にある「届かぬ」の「か」と「ぬ」の間を完全五度の高低差にするか短三度にするか迷っていた。完全五度のラであれば、美空ひばりの声は裏声となる。つまり、ラにするかファにするかは裏声にするか地声のまままでいくかという選択でもあった。

「彼女は歌手であり文学者でもある」



船村氏直筆の『みだれ髪』の楽譜。赤い円の部分が、船村氏が迷ったところ。

迷った結果、船村氏はラの方を選び、楽譜を仕上げたのだった。

さて、レコーディングのリハーサルとなった。そこで船村氏は美空ひばりの能力に脱帽することとなる。なんと美空ひばりは、船村氏が迷いに迷った部分をさらりとフアで歌ったのである。それが曲の全体像にみごとにフィットしていた。思わず、船村氏は写譜ミスということにしてそのままレコーディングを続けたという。

船村氏がその二つのパターンの違いを実際にピアノで聴かせてくれた。さらりと流れるように紡ぎ出されたピアノの音は、瞬時に日本人のソウルを感じさせてくれた。ラとファの違いがもたらす曲想のちがいに、慄然としたが、専門のピアニストではない船村氏が弾くピアノがいかに深い情念に満ちた音楽であるか思い知らされたのであった。「彼女との仕事は常に真剣勝負でした。これでもかこれでもかという闘いの連続であり、美空ひばりの天賦の才に触発され、夢中でできた仕事でした」と船村氏は言う。

また、美空ひばりは、詞に対する読解力も非凡であったという。

『みだれ髪』の冒頭は、「♪髪のみだれに手をやれば 赤い蹴出しが風に舞う」とあるが、これは心の状態が千々に乱れている様子を端的に表現したものだ。そういう言葉の背景にあるあらゆる情念を美空ひばりは読みとっていたという。だからこそ船村氏は美空ひばりを評して「文学者である」というのだ（実際、美空ひばりは俳句もたしなんでいた）。

美空ひばりが歌う船村作品

美空ひばり
船村徹の世界を唄うVol.2

2枚組 全33曲
歌：美空ひばり
発売：日本コロムビア

- 王将
- 別れの一本杉
- 男の友情
- 矢切の渡し
- みだれ髪 等

美空ひばり
船村徹の世界を唄うVol.1

2枚組 全34曲
歌：美空ひばり
発売：日本コロムビア

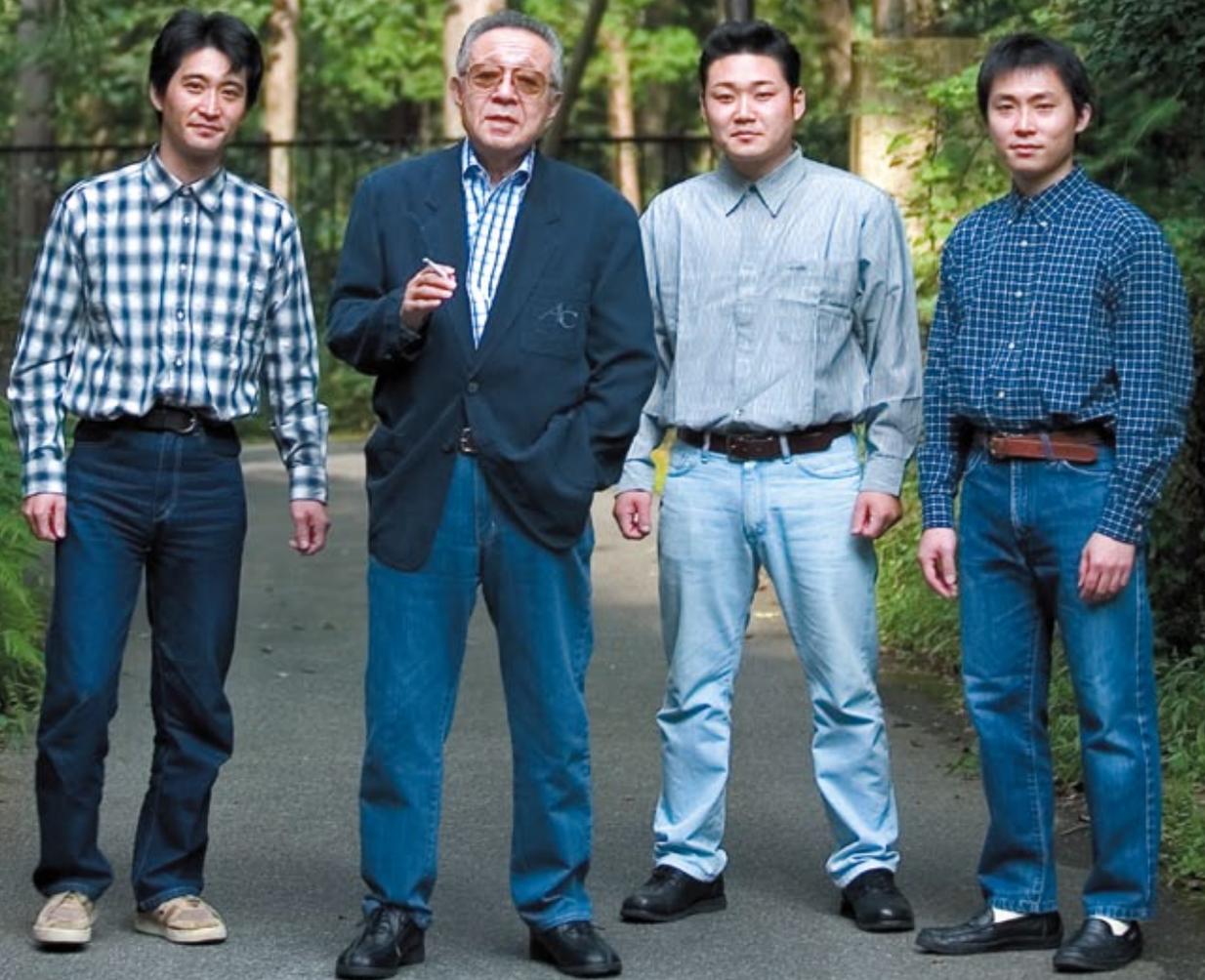
- 浜っ子マドロス
- 哀愁波止場
- 東京は恋する街
- ひばりの佐渡情話
- 手紙 等

「♪春は二重に巻いた帯 三重に巻いても余る帯」というのは、失恋による激ヤセですか」と問うた。「僕も星野哲朗に言ったんですよ。これじゃ大病じゃないのって（笑）」

ちなみに作詞家の星野哲朗氏は、横浜開港百年記念の歌を作るに際し、全国から詞を公募した時に応募したことがきっかけで船村氏に認められることとなった。選考委員だった船村氏は星野氏の作品を評価し、周囲の反対を押し切って一位と二位を星野氏の作品に選んでしまったのだ。いいとなればバランスなど考えない船村氏の実直な性格がうかがわれるエピソードである。

いずれにしても一流の人間同士が火花を散らし、永久に残るであろう名曲の数々が生まれた。それらは、まぎれもなく日本人の財産となっている。

「この子たちが歌手になれるとは限らない。
だから、きちんとした人間として育てたい」





筆

者は、究められた技術や精神をいかにして次の世代へ引き継ぎ、発展させるかということに興味を持っている。それは人間が人間に対してなしていることの中でもっとも崇高な行為のひとつであると思うし、またそれは人類全体の貴重な財産にもなりうると思っているからだ。

拙著「魂の伝承—アラン・シャペルの弟子たち」、小誌二〇〇五年五月号の「千年の時をつなぐ」、そして今回の特集を並べれば、フランス料理—宮大工—歌という図式になるが、技や精神を継承するという骨格は同じながらも、三者の間に異なる点をいくつか見いだすことができる。

フランス料理においての師弟関係は、多くの場合、技術の習得を最優先に位置づけているように思われる。また、修業する者は同じ師匠に長い期間師事することなく、いくつかの店を渡り歩くことが多い。フランスの文化ということもあり、師弟関係もドライだ。師匠が弟子たちの人間教育に関わることはほとんど言っていないほどない。

一転、「千年の時をつなぐ」で紹介した日本の伝統的な宮大工の師弟関係は大きく異なる。なにせ師匠と弟子がいっしょに生活をするのだ。それにはいくつかの理由がある。いっしょに生活しなければ修得できないことがたくさんあるからだ。しかし、それでも師弟関係にはわずかな距離があるように思われる。

では、船村徹流の教え方は？ 弟子たちと寝食をとるという点は宮大工と同じだ。しかし、宮大工で見られた師弟間のわずかな距離は見られない。師匠と弟子ががっぷり四つに組んでいると言っている。弟子たちは師匠である船村氏の生活と密着することを義務づけられ、私的な時間は与

えられていない。今、船村氏のもとには三人の内弟子がいるが、彼らは六畳一間を与えられているだけで、三人いっしょに川の字で寝る。また、内弟子の頭格は付き人となり、船村氏が全国どこへ行こうともいっしょに行動する。

歌のレッスンはほとんどない。同じ音楽でもピアノやヴァイオリンなどの西洋楽器の分野であれば、すべての時間をレッスンに割くはずだが、船村氏はときどき気が向いた時にわずかなアドバイスをする程度で、ふだんはなんにも教えない。歌の勉強など、カラオケにでも行って自分ですればいいという考え方だ。そのかわり、船村氏は弟子たちに徹底した人間教育を施す。礼儀や所作に関する厳しい教え方は、昔の日本の家庭教育を凌駕するかもしれない。また、生活をともにすることで、船村氏自身が長い時間をかけて培った社会観や人生観も伝える。おかげで、今いる三人の弟子たちは、現代の日本にまだこんな素晴らしい青年がいたのか！と感嘆するくらい好感の持てる若者たちであり、日本固有の文化に対しても深い洞察力をたずさえている。

「この子たちが必ずしも歌手になれるとは限らない。だから、どの世界に出ても恥をかかないような人間にしたい」と船村氏は言う。

住み込みの弟子を受け入れるということは、その人の人生の大半を預かるということだ。生半可な決意ではできない。船村氏ほど成功した人が、なぜあえてそのような煩わしいことをするのかと訝る人もいるだろう。一方、弟子入りした若者たちに対しても、多様な選択肢がある中でなぜあえて窮屈な住み込み修業をするのかと思う人もいるだろう。しかし、船村氏と弟子たちのやりとりを少しでも見ることができれば、そういう考え方が

いかに現代の薄っぺらな価値観によるものでしかないか思い知らされるはずだ。緊張感の中に、確固とした温かさが漂っているのだ。

船村氏に師事した人は合わせて数百人。内、百人以上がプロとしてデビューしている。現在、「船村同門会」の会長は北島三郎さんで、副会長が鳥羽一郎さんだ。どうして弟弟子のおまえが一郎で兄弟子の俺が三郎なのだと北島さんは不服(？)を唱えることもあるらしいが、船村氏の薫陶を受けた人たちの集まりがいかに人間味あふれるものであるか、容易に想像できる。

「この子を世に送り出し、果たしてこの子に風が吹くかどうか、何十年もこの世界でやっていたらわかること。早く出しすぎて失敗した例もあります。いい風が吹いている時に送り出してやりたい」デビューの時期はどのようにして見極めるのですか、との問いに船村氏はこう答えてくれた。

今年五月、弟子だった天草二郎さんがデビューした。やはり九年半もの長い間、船村氏とともに暮らし、厳しい指導を受けた人だ。郷里の熊本でのデビュー発表会の席上、船村氏はハンカチで何度も涙をぬぐったという。それを見た読売新聞のコラムニストが、「滅びつつある文化の美しい残照を見る思いがする」と第一面下の「編集手帳」に書いていたが、言い得て妙だ。まさに船村氏の温かい心が形となって現れた瞬間だったのだろう。

船村門下生の新たな出発

2005年デビュー

天草かたぎ



歌: 天草 二郎

水木 れいじ: 作曲
船村 徹: 作曲
馬 将包: 編曲
発売: 日本クラウン

熱くて温かいニッポルの青年

3人の素晴らしい内弟子たち

走裕介^{はしり}

本名・眞野裕之
北海道網走市出身



走裕介さんは、北海道網走市の出身であることからその名をつけられた。

弟子入りのきっかけは隣の北見市で行われたカラオケ大会に出場したことだった。その大会を催した人の耳に彼の歌声がとまったのだ。船村氏と懇意にしているその人は、「船村先生が内弟子を募集しているから、テープを送ってみてはどうか」と奨めてくれたのである。早速テープに録音し送ったが、なかなか返事がない。五ヶ月ほど過ぎた頃、突然、一週間以内に来てもいいという連絡が入る。時に平成十一年のことであった。正直、走さんを見てみると、日本の男もまだまだ捨てたもんじゃないなと思う。実に清々しく、ポジティブなのだ。付き人なので船

カメ憲一

本名・小倉憲一
愛媛県松山市出身

「カメと申します」

初めて会った時、そう言われて「？」となった。名刺を見ると、たしかに「カメ憲一」と印刷されている。

「おまえはのろまだからカメだ」船村氏の命名のセンスはたけし軍団に似ていなくもない。北島三郎さんがかつて「ゲルピン・チン太」という名前だったし（ゲルピンとは貧乏の意）、鳥羽一郎さんは「イワシ三匹」という、とてつもない名前だった。

カメさんは松山市の生まれ。優しい風貌ながら、秋山兄弟などいくたの名人物を輩出した風土のDNAがしっかりと刻まれているように感じる。

弟子入りのきっかけは、やはり地元で行われたカラオケ大会に出場し、審査員の目にとまったことだった。船村氏への弟子入りがない、愛媛大学を休学して栃木に来た。以来、六年間、修業の日々をおくっている。その間、実家に立ち寄ったのはたった一回だけ。

カメさんはふだん、どのような生活をしているのだろうか。「朝は六時頃起床し、炊事・洗濯

うちわ弾

本名・大門弾
秋田県秋田市出身



うちわさんも本名ではない。聞けば、顔の輪郭が「うちわ」の形に似ているからだそうだ。ここまできると凡人にはわからない世界である。

うちわさんは秋田県の出身。中学時代から演歌が好きで、将来は歌手になりたいという夢を抱いていた。社会人となり、東京で働いていた頃、やはり、あることから自作のテープを船村氏に送り、弟子入りを許された。平成十五年七月のことである。

「生活のリズムが一変しました。ここでは先生のリズムですべてが動いています。でも、嫌だとか苦しいと思っただことは一度もありません。夢が同じ先輩たちといっしょですし、自分が少しずつ変わっていくことも実感できますから」

村氏の行くところ、どこへでもついでいく。どこへ行くにも、ほとんどが彼の運転する車だ。当然、多くの会話を交わすことになる。その成果がしっかりと身につけていることは、走さんの立ち居振る舞いが物語っている。

例えば、船村氏が少しでも椅子を立つ気配を感じれば、さっと後ろへ回り、椅子を引く。船村氏が涙をかめば、さっと手を出し、ティッシュをもらい受けて自分のポケットに入れる。すべからくそうなのだ。常に気を発散させていなければ、できることではない。

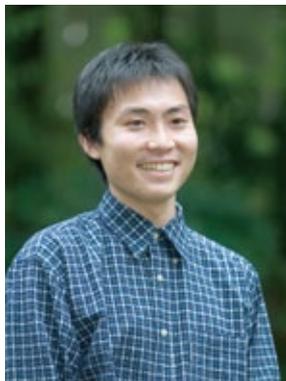
「つらいと思ったことなどありません。目標がありますから。むしろ、先生といっしょにいられて、ありがたいと思っています」

どこまでも謙虚で前向きなのだ。悲壮感はまったく感じられない。ステージにいる船村氏から突然声がかかり、歌ってみろ、と命じられることがある。自分の力を試す場を与えられるのだ。いつあるかわからないその時のために、常に準備万端整えておくことも忘れない。

彼はどんな歌い手になるのだろうか。きっと、背筋のきりっとした好男子として多くの日本人を魅了し、また良きお手本となっているにちがいない。

・掃除・庭木の手入れ・買い出し
・ニャーゴとワンちゃんの世話など、やらなければいけないことはたくさんあります。レッスンですか？ 先生がいらっしやる時に歌っている、うるさいと怒られますから（笑）先生が寝静まってからクルマの中で歌うか、先生が外出されている時に歌うかですね」

歌手になりたくて弟子入りしたのに、歌を歌うとうるさいと叱られるというのもおかしな話だが、それが船村流の指導法でもあるのだろう。何につけても、人の迷惑になるようなことはするな、というわけだ。



※船村氏が飼っている猫と犬。ベットと呼んではいけない決まりになっている。

船村師匠からどのような指導を受けているか、問うた。

「生活態度、特に言葉づかいについては厳しいですね。最近流行りの語尾上げや、ら抜き言葉などを使ってはいけないとか、常に相手のことを考えて行動しなさいなどと何度も言われています」

礼儀作法などの所作は、自然体できてこそ本物。そこまで到達するのは容易なことではない。特に最近のように、目上の区別も何もない社会において、きちんとした作法を身につけるのは至難の業だ。しかし、だからこそ、そういうものを体得した人は価値があるとも言える。

「先生が直接歌のレッスンをしてくださることはほとんどありませんが、ときどき社長（船村氏の奥様）がいらっしやった時に一、二曲聞いていただくことがあります。将来は言葉の背景にあるものまで伝えられるような歌手になりたいです」と目標を語る。

取材などで訪れるたび、うちわさんたちの細やかな配慮に感嘆する。それはそのまま一流の旅館でも通用するのではないかと思えるほど相手の立場にたったもてなしをさりりとやっけてのける。そういったひとコマにも船村氏の間人教育の神髄を見るのである。

遊ぶ船村徹



「遊びの合間に仕事をしている」

船 村氏独自の作曲法を述べたところで、曲想のもととなるモヤモヤについて書いた。そのモヤモヤは遊んでいる時にこそ湧いてくると船村氏は言う。書齋にこもり、眉間に皺を寄せて作曲するばかりが作曲ではない。

曲を作るためにということではないだろうが、船村氏は多彩な趣味をもっている。例えば、鉄道模型作り、溪流釣り、毛鉤（フライ）作り、カメラ、ラジコン、ゴルフ（ちなみにハンディはシングル）、庭作り（楽想館の約千五百坪の庭は船村氏のプランで植栽されている）、読書など枚挙にいとまがない。デブ、チロ、クーという三匹の愛猫や愛犬ポロ子と遊ぶことも楽しみみのひとつであるし、あらゆる酒をたしなむこともそうだ。つまり、船村氏は仕事だけの人ではないということだ。「というよりも、遊びの合間に仕事をしていると

いう方が正しいんじゃないかな」と船村氏は笑う。楽想館の近くに小さなダムがあり、その周囲が公園として整備されている。晴れた日、船村氏はそのコースを自転車で走る。上の写真がそうだ。のどかな風景の中、気ままに走るのがとても快適だと言う。そういう時も弟子たちは師匠の後をついて行く。同じ自転車では生気ので、かといってジョギングでは可哀想なのでキックボードに落ち着いたらしい。とは言うものの、キックボードで自転車の後をついて行くのはけっして楽ではない。何周か走ると、船村氏は弟子たちに言う。「どうだ、そろそろ腰が痛くなってきたか？」弟子たちはどんなに汗が吹き出ているようだが、笑顔で否定する。そんなやりとりがほのぼのとしているのである。



ライブスチーム作りは船村氏の十八番。ゲージのサイズや煙の汚れまでこだわる。



溪流釣りも得意。毛鉤（フライ）も自分で作る。



自転車で走るのもお気に入り。弟子たちは船村氏が何周走ろうとも、すぐ後ろをついて行く。

主張する船村徹



政

政治家も国民ももっと国を大事にしてもらいたい、と船村氏は声高に言う。

「戦後の教育とマスコミの歪んだ報道によって、この国の国民は自分たちが生まれた国を愛する心を失ってしまった。ひどいものです。愛国と言うと白眼視されたり、右翼だとかなんだとか。そういう国は世界中探したってありませんよ。ヨーロッパでもどこでも、街角には自然に国旗がはためいているでしょう。イギリスの名門・イトトンハイスクールの廊下には国のために戦死した兵士の写真がずらりと並んでいますよ。それを見て、軍国主義だなんて言う人はいません。日本だけでしょ、靖国神社を参拝したら軍国主義だなんて言う人がいるのは」

たしかにそうだ。筆者も同感である。先日も政教分離の観点から小泉首相の靖国参拝が違憲だと大阪高裁で判決が下されたが、では正月の伊勢神宮参拝、神社仏閣の修繕・保護、宗教関係の学校に対する助成は政教分離に反しないのだろうか。

戦後、日本人の国家観は極端なまでに歪められてしまった。その結果、私たちは自分たちが生まれ、育った国についてまともに語ることをさへ憚られるような空気の中で生活しなければいけない。

「国民もわがままなんです。年金も大事だけど、ひとつの同じ金庫から国民のためにお金が出てくるわけですから、もっと日本を大事にしないと。本来はそういうことを政治家がきちんと主張し、国民を啓蒙すべきなんです。でも、山賊みたいな政治家ばかりで、あつちでもこつちでも利益誘導の話しばかりです。情けないですね」

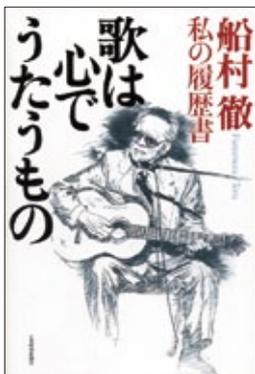
「自分の生まれた国に愛着を」

船村氏の怒りの矛先は教育にも及ぶ。

「いっぺん自分の子が学校の門をくぐったら教師にまかせるべきですよ。それを細かいことまで親が口を出すから、先生だって及び腰になってしまふ。体罰は絶対いけないというけど、悪いことをしたら殴るのは当たり前でしょう。それこそ愛情というものです。今は愛情をはきちがえています。これも戦後の悪しき教育の結果なんですよ。なんでもかんでも権利、権利。もっと先生を尊敬させるようにしないとダメです。今は校長がペコペコ頭を下げている時代でしょう。これじゃ、親と先生の相互不信はなくなりませんよ」

世の中のさまざまなことに対し、船村氏は多くの意見を持っている。残念ながら誌面の都合で紹介できないが、ほとんどが貴重な良識のある意見ばかりだ。

今、船村氏は日本音楽著作権協会会長、日本作曲家協会最高顧問、横綱審議委員会委員、産経新聞「ウェーブ産経」代表幹事、下野新聞客員論説委員など、さまざまな要職に就きながら精力的な活動を続けている。船村氏の思うような国になる日が、果たしてやってくるのだろうか。



船村氏の半生が綴られた本『歌は心でうたうもの』(日本経済新聞社)